

「不知火」、「はるみ」の安定生産に取り組む

■ 香川県農協小豆島柑橘部会みかん研究班 ■

(小豆農業改良普及センター 川原清剛)

●対象の概要

小豆管内のカンキツは、温暖寡雨の瀬戸内海気候を活かし、温州みかんを中心に約70ha栽培されている。特に中晩柑で6ha栽培されている「スイートスプリング」は、小豆島のブランド商品として出荷されている。

対象とした“みかん研究班”（以下「研究班」という。）は、香川県農協小豆島柑橘部会内の組織として平成16年に設立された。当時、「不知火」、「はるみ」を積極的に推進しており、会員が生産技術について研究を行い、そして交流・親睦を図りながら、果実の安定生産と有利販売を目指し活動を行ってきた。

●課題を取り上げた理由

「不知火」の栽培上の課題として、摘果の遅れや着果過多の影響などから、樹勢が低下し果実の小玉化・クエン酸が高い傾向が問題となっていた。また「はるみ」では、樹による隔年結果が激しく、年ごとの収穫量にバラツキが大きいことが経営的な課題になっていた。

そこで、研究班、農協、普及センターが連携して、この2品種の課題解決に取り組み、高品質果実の安定生産に向けた活動を実施した。

●普及活動の経過

1 モデル樹の設定

会員ごとに「不知火」は1樹、「はるみ」は2樹（表年1樹と裏年1樹）をモデル樹と設定し、農協、普及センターが摘果・剪定作業を管理して、会員の各作業の目安として活用した。

摘果時には、主枝先端の摘果と併せて夏季剪定を行うことで、その後に夏芽を発生させて樹勢の維持を図ることを推進した。

剪定時には、枝を強固に維持し、できるだけ着果位置を太枝に近づけるよう側枝の更新や夏秋梢の処理を行い、大玉果となる有葉花が発生しやすい剪定を実施した。

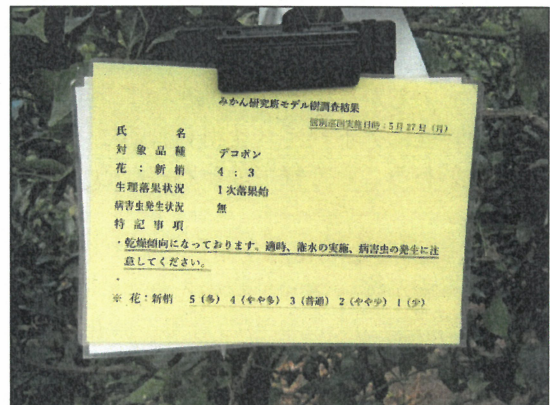


モデル樹の剪定後の様子

2 巡回指導

会員による合同巡回として、参加者全員がそれぞれの園地の管理状況を確認しながら年間3回程度（摘果・収穫・剪定の時期）巡回を行った。各園地の良い点・課題を農協、普及センターが指摘し、また会員間で意見交換することで栽培技術の高位平準化を狙った。

また、これとは別に農協、普及センターが個別巡回を開花や仕上げ摘果の時期などに随時実施して、園地の状況や今後の作業ポイントなどを「栽培指導票」としてモデル樹に表示した。



栽培指導票

3 園地品評会表彰

会員の栽培技術の向上に向けた意識啓発を図るため、毎年、園地品評会を開催した。

これは、モデル樹を設定した各園地の収穫前に、農協、普及センターが審査員となって、①樹体、②土壌管理、③病害虫防除、④果実の外観および品質、⑤食味などの項目を評価し、「不知火」、「はるみ」それぞれ1名を研究班の総

会で表彰してきた。

4 「さぬき讃フルーツ」への取り組み推進

小豆島柑橘部会は、「さぬき讃フルーツ」の認定生産者となって、「不知火」において2つの作型に取り組んでいる。

施設栽培作型は、ハウスミカンから「不知火」に改植した施設など活用して出荷している。

長期貯蔵（5月以降出荷）作型は、露地栽培でクエン酸が高い果実などを農協の予冷庫を利用して市場流通が少なくなるまで貯蔵し、有利販売を狙っている。

それぞれ、定期的な果実分析を実施して、「さぬき讃フルーツ」への取り組みの継続・拡大を推進した。



枝吊りを実施した不知火施設栽培園地

●普及活動の成果

1 栽培技術の高位平準化

一般的な講習会は、地域1園地を会場として実施しているが、今回の取り組みは、会員が自園地の管理にアドバイスを得られることや「モデル樹があることで栽培の参考になる」と好評である。

また、共通した問題点を発見しやすく、近年、かいよう病が多い傾向が認められたことから、地域の防除暦から同病害の対策を強化した産地の防除体系を関係機関の協力を得ながら組み立てられた。

2 「さぬき讃フルーツ」としての有利販売

高く売れる商材として「さぬき讃フルーツ」に取り組む、市場評価を得てきている。

「不知火」の施設栽培は、令和元年産の実績で、レギュラー果実と比較して単価が163%、長期貯蔵は、同159%と有利販売できた。

また、地産地消として「デコポン・はるみフェア」を直売所で年2回程度開催しており、特に「はるみ」は島内で人気があり、認知度も高

まってきた。

表-1 「さぬき讃フルーツ」出荷・販売実績 (t)

品種	不知火	
	施設栽培	長期貯蔵
平成29年	10.0	2.7
30年	13.9	1.6
令和元年	9.9	2.4
2年	10.0	2.5

3 会員の維持・増加

管内は、栽培者の高齢化による担い手の減少が進んでおり、研究班も同様である。

令和元年度は高齢を理由に栽培を中止する会員がいたが、関係機関が新規就農者へ園地継承を仲介し、栽培面積を維持できた。しかし、継承者は技術・経験も乏しいことから、今後も栽培・経営が続けられるよう支援していく。

また、新たに30歳代2名がカンキツ栽培を主とする認定新規就農者となった。いずれも栽培経験が未熟で、技術不足な部分も大きいことから、研究班に誘導して指導機関、同会員が支援していく予定である。

表-2 研究班会員数の増減推移 (名)

	増	減	会員数
平成28年	1	-	24
29年	1	1	24
30年	-	1	23
令和元年	2	2	23
2年	2	-	25

●今後の普及活動の課題

「はるみ」は取り組み前と比較して樹勢は改善されたが隔年結果の是正には至っていない。今後も早期摘果、樹冠上部摘果、5月剪定などを関係機関と連携して試験・展示していきたい。

また、管内優良園地の園地継承がスムーズに進むためには、収益が見込め、継承者の技術・経営的な不安を少なくし、取り組みやすい環境づくりが重要である。①鳥獣・病害虫・凍霜害対策、②「さぬき讃フルーツ」の推進、③省力化に向けた充電式剪定ハサミ、リフトを活用した栽培、④産地ぐるみの技術支援体制が大切と考えており、関係機関と取り組んでいきたい。